

# 酒の町池田の輝き

—『誹諧呉服絹』の文雅—

プロローグ

蝸牛廬文庫のあるじ林田良平翁（一九〇〇〜八七）は、その一生を、池田の歴史の解明と文化の顕彰にささげた。父祖の代から収集された書籍や文献は、目も見張るばかりに、多種多様かつおびただしいものがあつた。その膨大な資料の調査のために、いく度も文庫をうかがうことがあつた。調査は、いつも和本に埋め尽くされた室内でおこなわれた。老翁はずっとかたわらに控えて、調査のようすを見やりつつ、池田の歴史、また池田が生んだ文学や文人のことを語って倦まなかつた。まるで池田の生き字引のようだった。

蝸牛翁林田良平氏は、その池田についてこんな文章を残している。

藤田真一

池田の地は五月山南麓、猪名川東岸に展開する溪口聚落で、酒を造り炭を産し、食糧物資豊富で集散の市場どころとして古来その名が知られてゐた。是にひかれて詩酒生涯を楽しむ文人墨客の来往頻りであつた。然しこの人々は単なる酒などでは寄り付かない、そこには此の人々に応接し得る相当教養ある雅人がゐてこそ文人墨客の足が向くのである。（中略）池田文学の華は過去、現在、未来へと咲き継ぎ咲き匂ふのである。然しこの華も栄枯盛衰は免れる事は出来ない。<sup>注1</sup>（池田百年の歩み）

いまの池田の町は、北摂の地にあつて、閑静な住宅都市といつたおもむきを呈している。だが、かつての池田は、連歌・俳諧また和歌・漢詩、あるいは絵画などがさかんで、文華の香りをいっばいたたえた町だった。そこへ、京や大坂あたりから

文人墨客が足繁くやってきては、文雅の境をたのしんだ。近世期の池田は、文人の寄り集う文化都市だった。蝸牛翁の文章は、そんな池田の空気をあますところなく伝えている。

元禄九年（一六九六）の『誹諧呉服絹』<sup>くればきぬ</sup>は、池田の文化的底力を如実にみせた一書である。編者稲丸はむろん池田のひとつ、入集者も地元から多くの顔ぶれをそろえ、内容も池田色に満ちている。そのうえ、池田の地域に限定されない広がりをもっており、たんなる俳諧撰集にとどまらない、豊かな懐をもった書物となっている。はやく室町期には著名な連歌師の牡丹花肖柏が住み着いた地であり、その残光が江戸期に入つてもかがよい、俳諧の光となつて輝きをとりのどした。本書をひもときつつ、元禄期のある地方都市の奥行きをさぐってみる。これが本稿の目標である。

## 一 書誌と編者

『誹諧呉服絹』（以下『呉服絹』）は稀本である。上下二冊揃いの伝本は、大阪府立中之島図書館所蔵本（甲和／224）のみである。よって、まずこの本の書誌データを掲出する。

書型 大本二冊（27・3×17・3 cm。やや縦長）。袋綴じ。

題簽 「呉服絹 乾」、「誹諧呉服絹 坤」（中央）。

\*上巻（乾）は、題簽の上部角書に破損あり。

表紙 とのこ色・無地。

丁付 上巻「くれば上 一（〜十五・廿五・十七〜廿九終）」

全29丁。

下巻「くれば下 一（〜卅五終）」全35丁。

上下とも、前に遊紙一葉。

字高 14・8 cm（一ウ一行目）。

匡郭 17・0×13・1 cm（挿絵第一図）。

序文 「稲丸春艸」<sup>しゅんそう</sup>。

跋文 1 「元禄九歳丙子花朝日 稲丸誌焉（印）（印）」。

2 「元禄九降陽中其晨 落月庵西吟艸」。

3 「丙子孟春下澣 宮川一翠子書三養軒下」。

挿絵 上巻に見開き4図、下巻に同5図。画者は不明。

刊記 「京寺町井筒屋庄兵衛板行」。

版下 題簽・序文・本文・跋文1は同筆ながら不詳（あるいは稲丸か）。

跋文2は西吟自筆、跋文3は一翠子自筆。

右のうち、注目点、注意事項を指摘しておく。

まず書型について。大本という書型は、元禄のこの時期の俳書としてはかなり珍しい。<sup>注2</sup> 俳書は半紙本が圧倒的に主流となっていた。ただし、字高や挿絵の匡廓のサイズからすると、本来の版面は半紙本だったともみられる。当該本の仕立てが特別仕様だった可能性もある。遊紙の挿入も、特別本的一端か。

上巻の丁付で、「十六」とあるべきところが、「廿五」と打たれている理由は不明。最初の挿絵箇所であることと関連があるかもしれないが、合理的な理由は見いだせない。

刊年は、井筒屋俳書の通例から記載されないが、跋文の年記から、元禄九年に刊行されたと判断される。

つぎに、編者稲丸について、まず『国書人名辞典』によって略記する。姓は坂上氏、通称、はじめ十五郎、のち弥右衛門。

号、稲丸、法名、可貞。撰津池田のひとで、生没年は未詳とする。だが、『池田人物誌』の記載は、これとやや異なる。姓は阪上、通称を太郎右衛門、法名を保誉宗仙禅定門、生年を承応三年、没年月日を元文元年十二月十九日とする。享年は八十三とある。ただし、論拠はしめされていない。墓所は、池田本町の西光寺とされる。<sup>注3</sup>

柿衛文庫に蔵される、稲丸の短冊「はるたつや冬毛の筆もう

すがすみ」に、左のような裏書きが書きつけられている。

宮川正由門弟、撰州池田住、坂上氏十五郎、後弥右衛門、法名可貞、くればきぬの撰者。

『国書人名辞典』が、このメモに依拠しているのは明らかである。しかし、墓碑によって確認される法名と食い違いがあるなど、信憑性は確実といえない。ただ、「宮川正由門弟」の情報は軽視できない。これをふまえて、稲丸は「元禄九年五月に宮川松堅（正由、道柯居士）から俳諧伝授をうけ」たとされる（岡田利兵衛『鬼貫全集』解説）。となると、松堅の甥とも伝えられる宮川道達（一翠子）が、本書に跋文を寄稿するえにしも理解できる。両者の血縁関係については異論もあるが（『俳文学大辞典』「宮川道達」、いずれにしろ、稲丸は、京の貞門系に連なる俳士だったとおもわれる。

見事さや牡丹からくさ錦織 良因軒 頼久

呉服穴織いとゆふなれや機松山軒 西夕の音

此吟は、一とせ奉納の句なりしを、社まうでせし折写し置ぬ。頼久は祖父、西夕はやつがれが父なり。

これによると、祖父の代から三代にわたって、俳諧をたしなむ家柄だったことがわかる。おそらく稲丸は、幼少期から俳諧に親しんでいたと推測される。

また、父の西夕について、『呉服絹』よりやや遅れて池田で出版された『夢の名残』（宝永二年序）という本の序文に、興味深い記事がみえる。

我さと、寛文に屋勝あり、貞徳の流なり。延宝に西夕あり、宗因の質なり。これらのゑらびにもれて、海棠が時にあへるに、たり。

屋勝は、本名を津田道意といい、慶長十年（一六〇五）に京で生まれ、寛文年間に池田に移り住み、医業を営んだ。池田俳壇の草分け的存在となった。俳諧はもとより貞徳流。「我さと」とあるように、かれに導かれて、池田の町が貞門流だったみたいよ。

これに続いて、延宝期になると、西夕がでて、俳風が宗因流、つまり談林系に変わったとのべる。延宝といえは、時あたかも談林俳諧の真つ盛りだった。この西夕が、稲丸の父にあたる。

この変遷から考えると、祖父の頼久は貞門、父の西夕は談林と、ちょうど時代のながれにそった趨勢を反映しているとみてよい。では、本書の元禄九年時はどんな俳風だったのか、あるいは池田の俳系がどうなったのが問題になる。『呉服絹』の俳風や俳壇の関係については、本書の入集状況を腑分けするなかで、改めて詳説することにする。

さて、岡田利兵衛氏は、先掲『鬼貫全集』解説において、稲丸は海棠に改号して活動を続けたと説いている。稲丸としての活動が、元禄十五年の『藤花蔓』以後は姿を消したのと入れ替わりに、海棠の号が三年後、宝永二年の『夢の名残』にあらわれる（先掲序文参照）。稲丸が阪上氏、海棠が坂上氏と、両者の姓が酷似することを確認したうえで、同一人かとし、このころに稲丸が改号したのではないかと推測する。『夢の名残』が、連歌師牡丹花肖柏の百八十年忌を記念して上梓された俳諧書で、池田にふさわしい一書だった。

ただし、海棠は翌宝永三年（一七〇六）には没しており、『池田人物誌』に元文元年（一七三六）没とあるのと齟齬をきたす。三十年のちがいは大きすぎる。両者を同一人とするには、なお根拠薄弱というべく、いまま少し精査が必要であろう。<sup>注4</sup>

さて、稲丸には、俳人とはべつ、世人としての顔があった。かれの阪上家は、代々山本屋と号した酒造家だった。元禄十年の酒造高は三六二石と、池田の中位を保っていた。酒造業を経営したことと、『呉服絹』を編纂するほどに俳諧活動をしたこととのあいだには、浅からぬ関係があった。そのことを論じるまえに、やや細部におよんで本書の内容をみておく。

## 二 本文構成

上巻と下巻では、性格をいくぶんか異にしている。手早く言ってしまうと、上巻は、池田の産土神ともいふべき、呉服・穴織あなはの両社に作品を手向けるのが主眼となっている。対して、下巻は、当時の池田の魅力を紹介し、世に伝えようとする意図をもっているようだ。そこで、細部に分け入ることにする。各巻の内容を箇条書きふうにしめす。

### 【上巻】

①まず稲丸の序文。応神天皇の御代に、呉国より綾織りの技術が渡来し、呉服の里に居着いたという説話を伝えて、池田の古代よりのうるわしい由来をのべる。

②つぎにくるのは、「呉服絹四時不同」と題する奉納吟の数々。発句と連句、両形式が混在している。最初に、宗祇や肖柏ら古人六人の発句を掲出したのち、京・大坂・江戸の現役作者の吟詠を掲げる。貞門系作者が多いなか、京の轍士や江戸の不角の句もみえる。続いて、西吟・稲丸両吟歌仙、大坂・伊丹ほか畿内の作者の発句、また広島からも発句が入集する。さらに、風子・稲丸による両吟表八句、そして前に論及した稲丸の父祖の句が提示される。父祖の二句が、「一とせ奉納

の句なりしを、社まうでせし折写し置」いたものとされることに留意したい。本書の第一の趣意が、奉納であったことを明確にしている。このあと、池田俳人二十一名による織物（呉服絹など）に関する発句があつたのち、稲丸・西吟の表八句が掲げられる。

③「呉服塚くるわ輪名所発句」と題して、発句（一部連句）のオンパレードとなる。名所は、以下の計二十四ヶ所である。

星御門・絹掛松・織殿・染殿井・絹舒里きぬのへ・姫室・梅室・兼好松・御旅山・在岡城・菅丞相石・櫛坂・待兼山・杉が谷・女郎塚・皐月山・望海亭・愛宕火・茶白山・地獄谷・篝墳・塩墳・夫婦石・唐船淵

見開き挿図四葉のなかに、これらの名所を描き込んでいるのが注目される（一図六景宛）。『西鶴諸国咄』巻二「姿の飛のり物」の冒頭にも、「寛永弐年冬のはじめに、津の国池田の里の東、呉服の宮山、きぬ掛松の下に、新しき女乗物、誰かは捨置ける」などと描かれる名所である。なお、現在でも該当する地名が、いくらか確認できる。

末尾は、人角と稲丸による両吟表八韻でおわる。

### 【下巻】

下巻の劈頭は、挿絵入りで「呉服里八景」と池田の「名物」

の紹介にはじまる。

④「呉服里八景」とは、以下の八景である。

穴織の夜雨・牡丹花の庵月・小蟹川の雁・塩増山の鐘・桜橋の釣竿・蔵里茸の市・猪名川の渡舟・寺尾山の雪

順不同で、四景ずつ見開きの挿絵を計二葉に描いている。

それぞれの景色に、発句・連句が備わり、池田俳人を中心にして、各地の俳人が作品を寄せている。

⑤池田の名物は、「池田炭・池田鞆・池田酒」というかたちで明示される。添えられる挿絵は、道路をはさんだ町並みが描かれ、「呉服里名物三種」と表記している。名産それぞれについて、五から九の発句が配されている。各冒頭には、大坂の来山、京の溪鴉、江戸の雪戸の句掲げられる。発句につづく十二韻の連句も、炭をテーマとする。

⑥風子という池田俳人の追悼句文が置かれる。稲丸の俳友澄月亭風子が、元禄七年秋、行年三十一という若さで急逝したことを惜しんで、追悼の句文が寄せられた。

⑦以下は、一部連句をはさみながら、四季の発句がずらっと並べられる。句は池田をはじめ、さまざまな地域から集められている。さらに注目すべきは、末尾におかれた、沾徳・芭蕉・梅翁の発句である（後述）。

⑧最後は、稲丸・西吟・一翠子のあとがき三編と「穴織山」「呉服森」を図した挿絵二葉が収められる。

以上が、全体的な概要である。

### 三 入集者

ここでは、特徴的な入集者を取り上げて、その意義をただしてみたい。

まず、巻頭に置かれているのは、古人の奉納吟六句である。

このうち、宗祇の「雨をいとに声のあやおる郭公」と、肖柏の

「織出せ山も御調のから錦」の両句は、『大発句帳』（慶長く寛

永ころ刊）に確認できるが、そのほかの貞徳・宗因・任口・頓

阿の句は出典を確認するに至っていない。句の内容からして、

これらがそもそも池田のことをよんだものかどうか明瞭ではない。そのうち、宗因の「八朔や二日の日は又呉服鳥」は、素

外編の『梅翁発句集』（文政六年版）に、前書を「呉服社」とし

て入集する（『西山宗因全集』第三巻）。だが、もし素外がこの

『呉服絹』を典拠としたのだとすると、問題の解決にはならな

い。宗因の作をふくめて、これら先人の句をどこから得たのか

詳細はわからない。

出典の信憑性に不足があるとはいえ、連歌・俳諧史上の大立て者が開巻冒頭をかざったとなれば、本書の権威づけには申し分ない顔ぶれといえる。産土神に奉納するというのだから、これらも相應の役どころを得たというべきだろう。

つぎに、「呉服絹四時不同」と題して、四季の句が列挙される。発句全九十四、連句が満尾した歌仙一、表八句二となっている。すべて「呉服絹」を主題とする吟詠である。

早いところに位置する面々を掲げると、以下のような様相となっている。括弧に、出身と俳系を注記したが、俳系については、およそのところで注した。

季吟(京・貞門)・信徳(京・貞門)・言水(京・貞門)・轍士(京・談林)・和及(京・貞門)・我黒(京・貞門)・晩山(京・貞門)・幸佐(京・貞門?)・鷺水(京・貞門)・風慮(大坂・?)・虚風(大坂・?)・不角(江戸・貞門)・立志(江戸・貞門)・一品(江戸・貞門)・正由(京・貞門)

季吟・信徳以下、当時の錚々たる俳家が列座する。そこには、京都の貞門系の重鎮が顔を揃えるばかりでなく、大坂や江戸の俳人もまじっている。あわせて、編者稲丸が西吟と歌仙を巻いているのも見落としてはならない。

調査の及ばない点もあるが、これらはみな在世俳人の作と考

えられる。上巻八丁表、西吟・稲丸の両吟歌仙の直後には、つぎのような前書を伴った発句がみえる。

此集、編をおもひ立ぬとて、人々へ申かはせしなかに、こと初よりこれらの句を見る。まづく余吟をまたずうちつけに、

染出しや朧の月の呉服絹

猪名野隠士 宵闇堂

これによると、稲丸は全国の俳人に向けて、句を寄せることを要請したものと推測される。そのとき、「呉服絹」をテーマとする旨が伝えられたにちがいない。「こと初よりこれらの句を見る」という文言からすると、この両吟歌仙が早い段階できている、これに宵闇堂子が早々に賛同したことがうかがえる。ともかく、全国的に出句依頼をするには、俳人どうし、もしくは俳壇のネットワークがないとおぼつかない。

続いて、伊丹の作家がまとまって名前を連ねる。百丸・濁水・人角・春堂・蟻道・放言・酒人・鷺助の八名である。享保八年の『在岡俳諧逸士伝』にも搭載される、名だたる伊丹俳壇のメンバーたちである。そのあと、地元池田の作家が、蘭水・以水以下鹿也まで、計二十一名が入集している。

さて、このほか本書に入集するおもな俳人として、つぎのような名前を拾い上げることができる。

順水(和歌山・談林)・其角(江戸・蕉門)・伴自(大坂・談林)・由平(大坂・談林)・休計(箕面・談林)・来山(大坂・談林)・岩翁(江戸・其角門)・沾徳(江戸・調和門)

全体の入集状況から判断して、本書が特定の俳系や俳壇のつよい影響下にあったとはとてもみえない。「池田叢書」の解説に、このころは「談林風に代りて蕉風が勢を得て来た時代であったが、それでも地方に於ける談林の勢力には尚侮るべからざるものがあつた」と説かれるが、一概に談林系の俳書というわけにはいかない。かといって、貞門系ともいえない。芭蕉に加えて、其角や岩翁という蕉門系の俳人もはいつているのだ。

其角のばあいは、上巻「呉服塚輪名所発句」の冒頭、「星御門」のセクシオンに、「笹の葉に枕つけてや星むかへ」という句がみられる。その先頭に置くという扱いとなっている。とはいえ、当句は『炭俵』(元禄七年刊)に入集しており、採取先が明らかである。其角本人が句を寄せたとは考えにくい。

芭蕉も似たような事情が考えられる。芭蕉については、下巻の末尾直前に、「ためつけて雪見にまかる紙子哉」という句が置かれている。貞享四年作とされる句で、『笈の小文』『笈日記』『如行子』などに所収が確認される。直接の典拠は不明ながら、よく知られた人気句であり、芭蕉と交際がなくとも取材は容易

だったろう。句の内容も、池田や綾織りなどに無縁の作である。稲丸にかぎらず、池田・伊丹地域と、芭蕉もしくは蕉門とのあいだに直接的な関係は認められない。

それでも、芭蕉入集という事実は存する。それは、稲丸の側で、芭蕉の句を必要としたためではないかと想像される。芭蕉は、二年前に大坂の地で没した。芭蕉の死は、蕉門内で衝撃をもって迎えられたにせよ、俳壇をゆるがすほどの事件だったとはいいがたい。しかし、〈芭蕉〉の俳諧は存在感を増していた。そこに着目して、〈芭蕉〉の名を利用しようとした。作品を巻軸の直前に配したのも、そのあらわれとみることはできないだろうか。

そして、巻軸には梅翁、つまり宗因の俳諧発句をすえた。こうして巻軸から巻軸に至るまで、俳諧史をいろいろの数々の名士を点綴することによって、一党一派に偏することのない一大撰集にしおせた。全体として、貞門色でもなく、談林色でも、むしろ蕉門色でもなく、かといって池田のローカル色を誇示するわけでもない、そんな撰集に仕立て上げられた。上方とはいえ、京や大坂の周辺に位置する小都市にあって、地方性におけることのない気風を打ち出すものとなった。

こうしたことを可能にしたのは、稲丸が商家の旦那で、専門



俳人でなかったことが大きい。いわゆる遊俳のような存在で、俳壇の野心がなかったからこそ、これだけの人脈が築けたのだ。また、商売柄からいっても、特定の地域や人物とだけつながらないほうがよい。逆にいうと、満遍なく気配りができたのも、そんな稲丸ならではのことだった。

そこには、池田の経済的实力や地理的特性を忘れてはならない。そんな事情を、本書はみごとに映し出していた。

#### 四 産業の余福

うしろは山、南は紀の海三つの浦、爰に三愛の翁居を

しめたまふも、実げにさる事や、われも友とする人ありて、

おり／＼毎のたはぶれに、

事たりぬ茶あり酒あり池田炭

梅翁

巻軸をかざる宗因の吟である。「三愛」とは、三友ともいい、白楽天が愛してやまなかつた、琴と酒と詩の三つをいう（「北窓三友詩」）。ただし、「三愛の翁」がだれをさすのかはわからない。

もしも稲丸そのひとを指すとすると、宗因・稲丸両者の親密な交渉を知らせるものとなる。しかも、宗因が天和二年に没していることを考えると、かなり早くから関係があったことにな

る。稲丸本人でなくとも、その父祖にあたる人物であつても意義深い話となる。しかし、本句じたい、他に出典をみない作で、具体的な背景は不明といわざるをえない。

とはいえ、発句そのものは、池田にふさわしいよみぶりとなつている。茶の湯と名酒とそれに池田炭、この三品が揃つていれば、もうなんの不足もないというのだ。閑適の境地を詠じた句にほかならない。池田といえばまず酒がきて、つぎに炭がくる。ただ、茶と池田の関係は明瞭でない。だが、同様に酒処として知られる、猪名川をはさんだ隣町の伊丹では、残された茶会記から、酒家の旦那衆のあいだで盛んだったようすがうかがえる。池田の富家も茶の湯に親しんでいたと考えることはたやすい。

宗因の句が、実際に池田のことをよんだものかどうかは不明ながら、池田にふさわしい一句として巻軸にすえられたのはまちがいない。『呉服絹』では、そうした池田自慢の名産品を、「名物／池田炭・池田しりがい鞆・池田酒」と明示していた。

炭は池田で産出するのではなく、山間部で焼かれて、池田で取引されるというものだった。産地名でいうと、「一倉炭」もしくは「一庫炭」と称した。『毛吹草』（正保二年刊）には、「一倉炭／此所ヨリ池田ノ市ニ出テ売ナリ。故ニ是ヲ池田炭共云」と

ある。池田は、炭の集散地として機能していたということになる。『新修池田市史』の記述では、炭屋・炭商が池田の三ヶ町にあつて、四十軒の炭問屋を数えたとされる。

池田炭といえば、茶の湯に用いられる最高級品として知られていた。『本朝食鑑』（元禄八年刊）には「摂津の池田、一庫山中の炭第一となす」としてされる。『摂陽群談』（元禄十四年刊）にも、「此炭、自然と香甚美にして、火気強く和也。因つて茶炉ロに置おけ」と賛美されている。

つぎの「鞞」は、「牛や馬を制御するために尻に巻いて、からみつける組緒」（『日本国語大辞典』第二版）であり、色とりどりの装飾的なものがあるという。『摂陽群談』では、「同邑（池田村）に作り、宜く所々に設之、多おほくは牛馬を飼かふ百姓の家に求む」と書かれている。炭やつぎの酒のように他国へ移出する名産品というのではなく、稼業をいとなむうえで欠かせぬ、池田特有の産物だったことがわかる。

「池田酒」は、隣の伊丹酒とならんで、江戸をはじめ全国に聞こえた名酒だった。柚木学著『酒造りの歴史』（雄山閣出版）によると、元禄十年（一六九七）には伊丹とともに一万石以上の醸造量を誇っていた。『新修池田市史』では、宝永三年（一七〇六）のときは伊丹を大きく上回る石高だったとされる。

酒造りは、江戸期の産業のなかでは、最大規模の工場と高度の技術力、さらには熟練の職人という労働力を必要とする業態だった。良質の米や水といった原材料が調達できるという立地条件が要求されるとともに、大きな資本金が不可欠の産業であつた。池田や伊丹は、それらすべての要件を備えていたということだろう。

酒造はまた、たいへん付加価値の高い業種である。これが軌道にのって資本力を増強してゆくと、醸造元が富み栄えるだけでなく、町全体をうるおし、繁栄をもたらすだろう。経済的な余裕は、精神的なゆとりに結びつき、文化的ないとなみを促すことにつながってゆく。石川真弘「かくれ里の俳諧」（『文学』二〇〇五年三―四月号）に縷々説かれるように、伊丹に花開いたさまざまな文化的事象は、酒の力を背景にしたものだった。伊丹の俳諧も、酒に咲いたひとつの花であり、文化だった。鬼貫をはじめ、伊丹の数ある俳人の多くが、酒屋のあるじであったり、その係累であつたりした。池田のばあい、酒造家の実名と俳号の照合ができていないが、伊丹に徴して、ほぼ同様の趣をもっていたとおもわれる。現に、『呉服絹』の編者稲丸は、山本屋という中位の規模をもつ酒造家のあるじだった。

なんとといっても、池田は酒によって繁栄がもたらされた町で

ある。その町が、「名物」の酒を喧伝しようとするのはうなずける。池田で盛んになった俳諧という文芸も、酒造という産業抜きには考えられなかった。『俳俳呉服絹』出版の基盤は、まさしく酒にあった。

## 五 交易のうるおい

だが、池田の俳諧は財力だけでできあがったわけではない。金さえあれば文学が成る、そんな単純なものであるわけがない。北摂に位置する池田の、もうひとつの側面を考慮することが必要である。

『摂津名所図会』「池田」の条に、つぎのような説明がみえる。都会の地にして交易の商人多し。これより北の方の山家より所々の産物を運び出でて、朝の市・暮の市とて商家の賑ひ、ことには酒造りの家多くありて、猪名川の流水を汲んで造る。味ひ美にして、官家の調進とす。これを世俗、池田酒と賞して名産とす。また北の方の山家より炭を多く製して出だす。この所の市店へ運び交易すれば、池田炭といふ。茶席の炉中に焼いて可なり。

「都会」たる池田の繁栄が、炭と酒によってもたらされたこ

とを指摘するのはいうまでもない。だが、さらに注目すべきは、一度ならず出現する「交易」の文字である。池田が、産物の集散地としてのみならず、朝市・暮市のたつ交易の中心地として描かれている。『新修池田市史』に引かれる文書（蝸牛廬文庫蔵）によると、寛永十八年の時点で、十二斎の市が開かれていたという。つまり、ひと月の半数近くの日程で市がたったことになる。

『摂陽群談』の記述を借りると、つぎのようになる。

十二度の市を立、近里隣郷の土民・百姓竝に商家・樵夫等に至まで、市店に群むらがりて、米穀・飲食・果菰・衣服・器物・諸材・柴・炭・鳥獸の類まで、売買之、益まよます繁栄の市也。

同書にはまた、山間部で産出される炭がこの市で売買されるがゆえに、「池田炭」と称されると述べられている。池田は生産都市という以上に、物資の流通によってうるおったことが想像される。

こうした交易・流通が盛んになるためには、交通手段の発達、交通網の整備が欠かせないものとなる。その意味でも、池田は絶好の地理的条件をそなえていた。

まず陸路。池田は、中心部もしくは近隣地区をさまざまな街道が通っていた。町の南東部を横切る西国街道は、京都に直

接、最短でつながるとともに、西南方面は伊丹北部から西宮、さらに播磨方面へと続いていく。大坂からやってきた能勢街道は、池田の中心部をつらぬいて、猪名川沿いを北上して丹波へと通じる。一庫で生産された炭も、この道を運ばれて来た。有馬道を行くと、現在の宝塚を抜けて有馬温泉に通じ、途中でわかれて、丹後にまで達した。あるいは、池田からまっすぐ南下して伊丹の市街地を抜け、その先は尼崎まで行く道もあった。文字どおり交通の要衝というべき、陸運の好位置を確保していた。縦横にめぐる街道に乗って、酒や炭を含むさまざまな物資が行き交ったことは容易に想像される。となると当然、運輸に従事する者どもがあつたはずである。池田では、中世以来の呼称である馬借が活躍をしつづけたという（『新修池田市史』）。池田村は、徳川家康から御朱印を下付された、天下に聞こえた馬借所だった。そうになると、そこには多くの運搬業者がいて、馬をかけて物資の運搬にあつたということになる。

そのために街道には、江戸初期から宿駅が整備されていた。瀬川・半町（はんちやう）（以上で一宿。箕面市）・伊丹・昆陽（こや）（以上伊丹市）・小浜（宝塚市）・西宮・生瀬（以上西宮市）・尼崎、それに池田、これらを八宿と呼んで、公的な継立ての宿駅に指定された。

『呉服絹』には、「呉服里名物三種」の図が添えられている。

図には、街道筋とみえる町並みが描かれ、道の両側には店が軒を並べ、往来には通行人とともに、馬や牛が歩みを運んでいる。酒屋のしるしである酒林（帘・杉玉）が軒先に下がる店があったり、屋内に炭か薪のみえる店もある。その酒屋とおぼしき家の裏手には、大きな蔵も描かれている。まさに交易都市池田の繁栄ぶりにうつつつけの図柄といつてよい。

だが、古来よりの馬借の威勢は、近世期のもうひとつの運送手段である水運の活用をはばむ要因ともなった。池田すぐ西には猪名川が流れ、大阪湾へと通じていた。これを利用すれば、大量にしかもすばやく尼崎や西宮へと輸送ができたはずである。元禄ころには、猪名川の利用願いが何度となく申請されたが、その都度、馬借業者の根強い反対にあつて、実現に至らなかった。小規模な利用はあつたかと考えられるが、公許がおりないうちは、大量輸送はむりだっただろう。そのため、陸路、神崎川まで行って、そこから船に積み替えて、江戸をはじめ、遠国へと物資の輸送をおこなうことを余儀なくされた。こうした保守的姿勢が、やがて町の活力をそいでいき、酒造業でいうと、海に面した西宮や灘に主導権を奪われる結果を導く遠因となったことはいなめない。だが、それはまた後の世の話。

酒と炭の町といわれる池田だが、その名産品の生産と流通を

ささえたのは、交易の力だといつてよいだろう。通商・交易が、池田の繁栄を約束したのだ。もっと重要なことは、街道を運ばれるのは物資だけではないということである。物資に乗って、当然ながらひとの往来がはげしくなり、ひとに連れて、文化や精神もいっしょにやってくる。西国街道で京都と直結し、能勢街道で大坂と結ばれている池田は、千年の厚みをもつ伝統文化と、新しい経済都市の活況を伝える新興文化、ふたつながらに吸収するのにかっこうのロケーションをそなえていた。

そのことは、『呉服絹』に如実に映し出されている。入集者の顔ぶれを一覧すると、ただちにわかる。季吟・信徳・言水をはじめとする、京都の貞門派の面々が名を連ねているかと思えば、西鶴・休計・来山など大坂を代表する談林系の名も見られる。伊丹の俳士がまとまって入集しているのは、俳諧の盛んな隣接酒都としては当然のことである。周辺地区の多田や山本、さらに尼崎や和歌山からも句が寄せられている。さらに、江戸や広島といった遠隔地とも関係をもっていた。このような広がりようは、俳壇的なネットワークをしめすとともに、水脈としては池田の文化的交信のすがたをうかがわせるといつてよい。

水田西吟が、跋文を書いたり、稲丸の連句相手になつたりと、本書成立に重要な役割を果たしたのも、街道抜きには考えられ

ない。かれは桜塚（豊中市）に住んでいた。桜塚は能勢街道の一宿駅で、大坂と池田のちょうど中間地点に位置する。西吟が談林系の俳人だったということは、ひとつの理由にすぎない。稲丸の身近なところに、『庵桜』などの俳諧書の経験を有する俳人がいて、編集の大きな助けとなった。それがたまたま西吟だった、そう考えるべきだろう。

池田という地方都市にとって、道は各地の俳人をつなぐインフラともいえるものだった。<sup>注5</sup>道にのって俳魂が集まってきたといつてもよい。『呉服絹』は街道が運んできた集貨物だった。

## 六 呉服里八景

『誹諧呉服絹』には、上下巻合わせて九図の挿絵がはいっている。挿絵入りの俳諧書といつても、いわゆる絵俳書ということにはならない。図柄は、発句など俳諧作品にまったくかわらない。図はすべて、池田の地にゆかりの光景でしめられている。

上巻の四図は、「呉服塚輪」と題されている。池田の町は、中世、池田氏によって築かれた城に由来する（近世初期に廃城）。その名残として、「塚輪」と称したかと考えられる。郭内の名所

や施設を二十四ヶ所あげて、それらを六ヶ所ずつ四図に分けて描いてみせた。さらに、各所にちなんだ発句もしくは連句を掲げたのである。したがって、図柄は名所図そのもので、俳画的なものではけっしてない。

下巻では、さらに名所的な要素をつよめる。それが巻頭におかれた「呉服里八景」である。「穴織の夜雨・牡丹花の庵月・小蟹川の雁・塩増山の鐘・桜橋の釣竿・蔵里茸の市・猪名川の渡舟・寺尾山の雪」、以上の八景である。ここでも各名勝にかなった発句または連句がそえられる。たとえば、「穴織の夜雨」では、由平の「桜く月やあやとる夜半の雨」以下二十三発句と表八句、「牡丹花の庵月」では、幸方の「牡丹花は酒すかれしかしら月夜」以下十七の発句、といった具合である。上巻の名所図とともに、八景図は本書の目玉ともいえるものだった。

とはいえ、こうした名勝が同居するのは、俳諧撰集にはそぐわないようにもみえる。この問題を考えるためには、俳諧の方向からだけでは解き明かせない。

中国で「瀟湘八景」が確立したのは、十一世紀、宋代のこととされている。それが日本に持ちこまれたのは、室町期にはいつてからのようである。絵画や漢詩に描かれた作品が渡来し、画題・詩題として親しまれるにつれて、和歌題としても詠

じられるようになった。その様相は、堀川貴司著『瀟湘八景』（臨川書店刊）に詳述されている。その流行現象が、この『呉服絹』にも及んだということになる。

日本独自の八景ものは、「近江八景」を嚆矢とする。成立は確定的でないものの、ほぼ確実なのは、安土桃山から江戸初期にかけて定着をみたということである。近衛前久・信尹父子の関与が指摘されている。近江八景が伝統的な歌名所をベースにしてできあがったのに対して、江戸期になって、新しい名所として数々の八景が選定されてくる。そのひとつ「金沢八景」は、元禄元年（一六八九）に、徳川光圀に招聘されていた渡来僧東臯心越によって定められたものという。

このころ、各地にさまざまな「〇〇八景」が考案された。延宝八年（一六八〇）の『扶桑名勝詩集』には、京都の「修学院」から「肥前島原」まで二十九の八景題があがっている。地域は、都から僻遠の地にまで及んでいる。さらにこの本には、八景だけでなく、さらに十景あるいは十二景の題もみえる。十景では「修学院御苑」から「安芸広島」まで三十三、十二景では「凹凸窩（詩仙堂）」から「紀州高野山」まで十三の題が掲げられている。宝永七年（一七一〇）刊の『兵庫名所記』にみえる、「兵庫十景」と「須磨浦十景」の題には、「扶桑名勝詩集二出ル」と

いう添え書きがしるされる。享保二年刊の『住吉名所記』にも、『扶桑名勝詩』所載の「住吉八景」が、漢詩や和歌とともに収められている。

『奥の細道』の雲巖寺を詣でた場面では、「十景尽る所、橋をわたつて山門に入」と書かれており、曾良の「俳諧書留」に、「雲岩寺十景」が列記されている。旅中の備忘録である「書留」にメモされていることからすると、十景の存在を事前に知って立ち寄ったのではなく、現地で得た知識を記録したものだろう。『本朝文選』には、千那の「近江八景序」と題する文章も収録されており、漢詩人や歌人だけでなく、俳人のあいだでも、八景や十景への関心が少なからずあつたことがわかる。俳人はしくれとして、稲丸が八景に関心を抱き、ご当地池田の八景を打ち出そうとしてなんのふしぎはない。

さて、「呉服里八景」を再掲しておく。

穴織の夜雨・牡丹花の庵月・小蟹川の雁・塩増山の鐘・桜橋の釣竿・蔵里茸の市・猪名川の渡舟・寺尾山の雪

これを、「瀟湘八景」「近江八景」と比較してみる。比べやすいように、「呉服里八景」の名称にそつた順に配列する。

瀟湘八景Ⅱ瀟湘夜雨・洞庭秋月・平沙落雁・煙寺晚鐘・漁

村夕照・山市青嵐・遠浦帰帆・江天暮雪

近江八景Ⅱ唐崎夜雨・石山秋月・堅田落雁・三井晚鐘・瀬田夕照・粟津青嵐・矢橋帰帆・比良暮雪

「呉服里八景」の命名が、これらに倣つたものであるのは一目瞭然だろう。ただ、「桜橋の釣竿」とあるのは、池田に漁村がないので、魚釣りにしたという苦肉の策だろう。「瀟湘八景」をもとに「近江八景」が案じられたというものの、ひとつ大きな違いがある。それは、前者には固有地名がわずか二例であるのに対して、後者ではすべて近江、それも湖南地域の地名と情景が結びつけられている点である。歌枕にしてからそうだが、特定の地名というものに思い入れするという、日本的な心性のあらわれといえるだろうか。「呉服里八景」でも、ことごとく地名と情景の結合になっている。

そこで改めて、俳諧の撰集に名所図や八景図が挿入されている意味を考えてみたい。じつは、名所案内記（地誌）と俳諧あるいは和歌とは、従来から密接な結びつきがあつた。地誌出版の始まりとされる『京童』（明暦四年刊）に、名所図とともに、すでに発句が挿入されている。その後、連綿と出された名所記には、かならずといっていいほどに、名所図と俳諧・和歌がそえられることになった。万治二年『鎌倉物語』、万治末年『東海道名所記』、寛文二年『江戸名所記』、同七年『京童追跡』、同十

一年『吉野山独案内』、同十二年『有馬山名所記』、延宝三年『蘆分船』、同七年『河内鑑名所記』と、陸続とつづく。これらには、すべて絵図と発句・和歌・狂歌があわせてそなわっている。

なかでも、『有馬山名所記』と『河内鑑名所記』の巻末には、作者名寄が句上げとあわせて掲載されている。後者では、大和・河内・摂津を中心に、二百名余もの俳人名簿となっており、まるで名所記にこと寄せた俳諧撰集ともいふべき様相をあらわしている。なかに、貞室・玖也・西鶴・梅翁などの名もみることがができる。

元禄五年に出版された『堀河の水』<sup>注6</sup>も、京都の地誌でありつつ、俳諧書の性格を有している。編者は、貞門俳人の似船である。第一部は、似船の住む七条界隈の名所案内で、そこに数多くの発句が挿入されている。第二部は、俳諧歳時記で、作例に当時の貞門作者の発句を掲載している。

ことに注目されるのは、巻一に「七条出屋敷十景」を出していることである。「稻荷旅社・田中時雨・瓜田夕照・南里刈雨・村路若草・七条商客・堀河蛙声・橋上秋月・東寺昏鐘・祇陀林藤」の十景である。本書も、八景もの、十景もの流行の渦中にあることをまざまざと示している。そして、それぞれの題のもと、案内記と名所図がそなわり、あちらこちらに発句がはさ

みこまれる。これらは三点セットだ。『兵庫名所記』に、付録のようにして兵庫八景の題が掲げられていたのは、ひとつのヴァリエーションとみられる。俳諧書『呉服絹』の「呉服里八景」も、同類といってさしつかえない。

『呉服絹』は、たんなる俳諧書の枠におさまるものではない。俳書であり、同時に名所案内の書でもある。右に列挙した名所記類も、現在刊行中の「仮名草子集成」(四十巻「し」まで)に収録されている。名所記も俳諧撰集も仮名草子も、互いに重なる性格を有し、ジャンル間に截然たる切れ目などない。それぞれひと色ではなく、多種の色合いをもっている。無理にひとつのジャンルに当てはめることなく、多様性そのままに受け取るべきだろう。それだけ多元性を含んだ一書と評してよい。

以上、元禄期の俳壇模様、出版状況全体のなかで、本書を位置づけるひとつの試みである。

#### エピソード

『誹諧呉服絹』は、俳諧撰集の体裁をとった池田案内書である。(池田の本)ということになる。俳諧作品をもつとせば、その代わりに、名所に関する記事を文章にしてのせれば、



押しも押されぬ（池田名所記）になつたはずだ。

すこし目先を変えれば（名所記）にもなりえたものを、あえて俳諧の書として編集したことになる。そこには、いくつかの理由・事情が考えられる。ひとことと言うと、俳書の便宜ということになる。第一に、企画や編集にあたる中心人物がおりさえすれば、発句などの出句依頼が容易で、また投句にあわせて出資要請もおこないやすいことがある。第二に、俳書は概して大部の書物でなく、手ごろな本にしやすい。それだけに手にとつてもらいやすいといえる。第三に、井筒屋のような俳諧専門の書肆が京都にあつて、活発な出版活動をしていたことも、有利な条件だつたと考えられる。その際、池田の町が、人脈や交通の点で、京都と確たる結びつきをもっていたことも好条件となつただろう。もちろん、こうした要件をもちえた背景は、それだけの俳諧力を町が培つたからにはかならない。そしてまた、そういう文化的・経済的基盤をそなえた町だつたということになる。

では、それほどの本の書名として、（池田）を冠するのではなく、（呉服）という古めかしい名称を用いたのはなぜか。そもそも本書のめざすところは、池田という町の魅力を案内・宣伝するとともに、将来の繁栄を祈願するものだつたと考えられる。

そのために、池田のたいせつな神さまに奉納する。それには池田の地主・守り神のような呉服の名称を戴き、また古代の由緒ある織物である「呉服絹」という名物を看板として押し立てるのがいいという、戦術的思惑があつたのではないか。神さまの御加護を後ろ盾にたのむには、奉納するに如くはない。

さて、『呉服絹』から百年あまり経過した文化十一年（一八一四）、同様の趣旨をもつた一書がなつた。井上遅春編の『呉江奇覽』である。編者じしんの序文に、「阪上稻麿のぬし、くれは絹てふふみかきあつめたまひしぞ。それさへ今は百とせのむかしとはなれり」と回想し、さらに「いにしへをおもふ微意を憐みたまへ」と、かつて池田が生みだした旧著の精神を継承する旨をのべる。収録作品も、『呉服絹』にみえる宗祇や肖柏の句を再録する配慮をみせている。

目録がわりのように、冒頭いきなり、池田の名所が列記される。その数三十四、大半は『呉服絹』と重なる。それぞれに詩歌がそなわり、情景描写の挿絵計七図が挿入される。全体に、先著の衣鉢をつぐ仕組みであることが了解される。ただ、発句・和歌に加えて漢詩が混在する点と、挿絵が名所図会風の写生的描きぶりになつている点で、前著とはようすが異なる。江戸も後期にさしかかつた時代を反映するものといつてよい。

編者遅春は、この時期の池田を代表する俳士であるが、本業が質屋だったというのも注意される。酒造家だった稲丸とのおちがいである。池田における酒造業の推移を思わせる一事である。時勢の変化は、俳諧の世界にもおよぶということだろう。また、一冊本で、全二十五丁と、規模を「呉服絹」の半分にするのは、重厚さより軽快さを感じさせるつくりといえる。跋文および挿絵は、呉服神社の神主である馬場仲文が書いている。神社へのゆかりをなおとどめるものの、奉納的気分はずつと希薄なものとなっている。入集状況は、古今また全国にわたる広がりをしめすが、やはり地元作者が多くをしめる。そのなかで、蕪村・几董系の俳人が目立つのは、またこの時期の池田の文化的・俳壇的情勢をしめすものである。

『呉江奇覽』は、さまざまな点で、『呉服絹』と差異をみせているにもかかわらず、旧著との紐帯が明確に意識されている。それだけ『呉服絹』が、池田にとって忘れがたい一書だったということである。一編の俳書から、時代の、また地域の文化の姿が浮かび上がってくる。本稿は、そんな撰集をよむ試みのひとつである。

(ふじた・しんいち／本学教授)

【注】

- 1、『新修池田市史』第二巻（二〇〇三年三月）P256による。
- 2、下巻のみの天理図書館綿屋文庫本も大本である。
- 3、西光寺の住職によると、現在の墓域に稲丸の墓は見あたらないとのことだった。
- 4、阪上・坂上とも、現在の池田・伊丹・宝塚界限に多くみられる姓で、同姓をもつただちに、両者が同一人とする根拠とはなしがたい。「阪・坂」の表記違いは問題にするまでもない。
- 5、二〇〇六年十一月二十七日、石川真弘氏に関西大学でレクチャーをお願いした。タイトルは、「元禄期大和の前句付俳諧」。そのなかにこんな話があった。元禄のころは、河内から大和中央部にかけて、俳諧よりも雑俳のほうが盛んだった。名主や庄屋クラスの富農が担い手で、俳諧と同様に富裕層が中心だった。かれらに俳諧と雑俳のあいだに上下区別の意識はなく、しかも、そこに談林の有力俳人が点者として関わっていた、ということだった。かたや、池田や伊丹といった北摂地域では雑俳がほとんどみられず、もっぱら俳諧に傾注した。従来の俳諧・雑俳史は見直す必要が生じてくるだろう。今後、俳諧と雑俳の地域的問題や、京・大坂の俳諧師と

雑俳との関わりが大きな課題となる。

6、京都の地誌叢書である、『新修京都叢書』第五卷所収。

【付記】本稿は、二〇〇五年八月に大阪府立中之島図書館で開催された「古典講座」における、同名の講演をもとにしたものである。

脱稿直前に、林田良平氏の筆写した『呉服絹』を入手することができた。奇縁を感じざるをえなかった。昭和三年写、原本は中之島図書館本とは別本だったようだ。